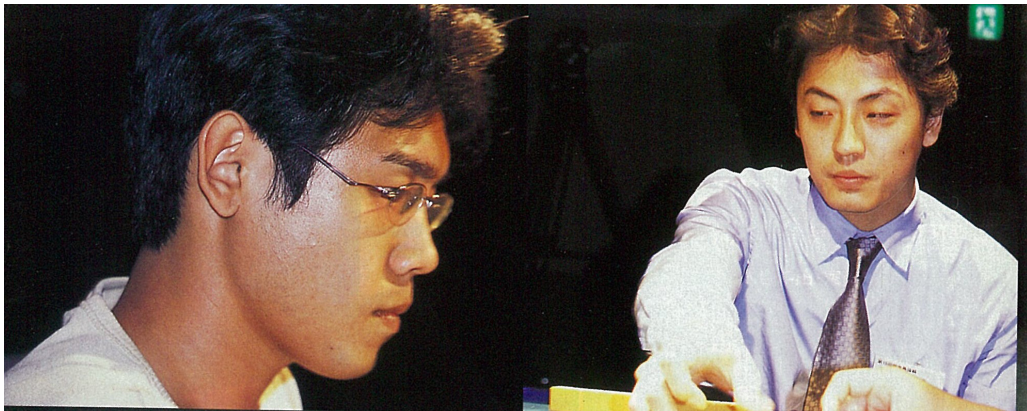
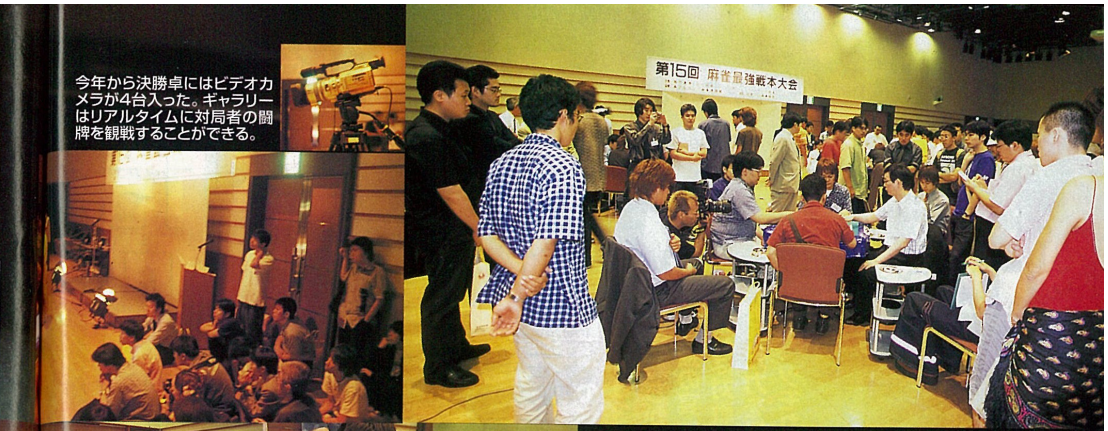


岡村にとって99%の勝利を目の前にしての悪夢だった。オーラス、2着目の鈴木とは16000点差。ハネ満をツモられても大丈夫。仮りに満貫を直撃されても同点。しかし準決勝での得点が岡村の方が上なので（最強戦ルール）巻られない。ハネ満を直撃されるか、バイ満以上をツモられない限り勝利は約束されていた。場にはドラが3枚切られている。捨て牌を見る限り誰もとんでもない手を作っている気配はなかった。14巡目までは……



今年から決勝卓にはビデオカメラが4台入った。ギャラリーはリアルタイムに対局者の闘牌を観戦することができる。

高目ならどこからでもトップ、安目でも直撃ならOKだ。吉田はヤミテンを選択したが、[illegible]がトイメンから出ただけ。トップのみが決勝進出のシステムなので、意味がないからアガれない。

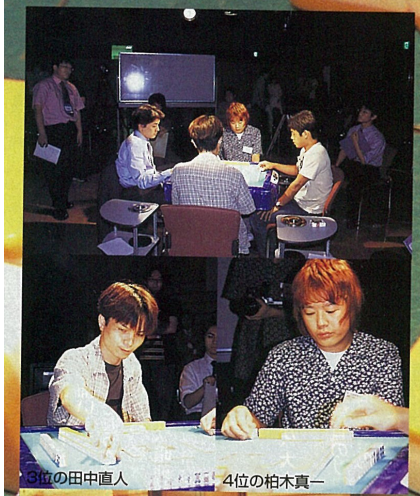
そこへ、倍満条件のクラッシャー海老海（プロ）がリーチ。

吉田が一発で[illegible]をツモ切るが、見逃し！アガっておけば裏ドラ[illegible]!!で倍満だったが、これが彼の流儀なのだろう。う～ん。もったいないが、潔い。

結果、流局し、田中直人（G1池袋）が勝ち上がりとなった。他卓からは、柏木真一（ふる～つ牌）、鈴木たろう（プロ）、岡村和幸（グッドラック）が決勝進出を決めた。

吉田光太、あと一歩。

敗退したものの格好いいぞ、クラッシャー海老海!!



3位の田中直人　4位の柏木真一

岡村がようやく切り出したのは、なんと[illegible]だった。四暗刻か。それとも、[illegible]引き、打[illegible]のピンフイーペーコー狙いか。

11巡目、[illegible]をツモって打[illegible]。12巡目、ツモ[illegible]　ドラ[illegible]

岡村はまたしても大長考に入るが、さすがに今度は打[illegible]でテンパイを取る。そして次巡、[illegible]をツモって満貫。前局の放銃を取り返したのであった。

よし、正木氏の言葉を信じよう。

岡村の下家、柏木真一から、岡村の背後へ場所を移した。岡村をマークだ。

東2局、岡村は鈴木に2千点を献上。しかし、東3局の親番で、鈴木から1万2千点をもぎ取る。チートイツドラ2のリーチだった。

そして、取られたら取り返す岡村に、強烈な配牌が入った。

ドラ[illegible]　東3局1本場。第一打に[illegible]を選んだ岡村の手に、[illegible]が入る。

2巡目のリーチ。[illegible]をツモ。裏ドラがのって6千点オール。

確信した。この人が優勝だ。

「関西人が全部持って行くで！」

「ワイも道頓堀にダイブや!!」

そんな、下手くそなキャッチが頭に浮かぶ。

「どうなの？　誰が勝ちそう？」

正木氏が耳打ちする。正木氏は本当に麻雀を知らないから、誰が優勢かもわからないのだ。

「正木さんの予想通り。今年は関西が強いんですよ」

「でも、まだまだ波乱は起こりそうだよね」

何をいうか正木さん。2着との点差は3万点近くある。波乱はあっても、岡村が優勝だろう。南場を待たずして、マジック点灯だ。

阪神タイガースよろしく独走を続ける岡村。時の勢いは怖ろしい。

東4局、田中直人がハネ満をツモるが、大勢に影響はない。

決勝戦

「あの、眼鏡をかけた子が勝つんじゃないかな？」

カメラマンの正木氏が言った。

「卓とアゴと腹で三角形ができてて、それが崩れないんだよな」

最強位を被写体として見てきた正木氏が発見した、ひとつの法則のようなものらしい。

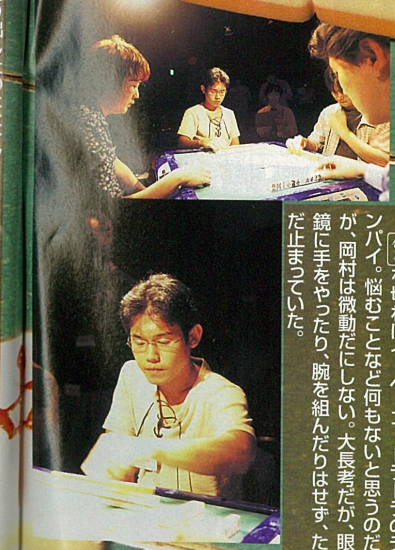
「オレは麻雀なんて全然わかんないけど。毎年見てると、なんとなく勝つ奴が予想できるんだよ」

そんなものだろうか。でも、妙に説得力がある。

眼鏡をかけた彼とは、神戸『グッドラック』代表の岡村和幸。

その岡村が、起家の鈴木たろうに、いきなり7千7百点を放銃。

次局1本場（牌譜参照）。8巡目、岡村の手が止まった。

ツモ[illegible]　ドラ[illegible]

[illegible]を切ればイーペーコードラドラのテンパイ。悩むことなど何もないと思うのだが、岡村は微動だにしない。大長考だが、眼鏡に手をやったり、腕を組んだりはせず、ただ止まっていた。